

I 研究テーマ「自立に向かう子どもたち」

研 究 部

1 研究テーマについて

(1) 研究の経緯

本校では、昭和59年度に「自ら学ぶ意欲・態度を育成する指導と評価」を研究テーマとし、以来、自己教育力の育成を中核として研究をすすめてきた。そして平成5年度から平成7年度までは、「豊かな感性を育む」を研究テーマとして、自己教育力の育成を、子どもの豊かな気づきや感じとりを育む支援といった点に焦点をあてて研究を行った。各教科・領域の授業研究を中心に行った3年間の研究の成果としては、次のような点が挙げられる。

- ① 学習ステップの構築……子どもの豊かな気づきや感じとりを育むための学習のステップが教科・領域特性に即して構築されてきた。「めざす子ども像」を、各教科・領域特性から描き出し、学習ステップに対応させていくことによって、学習ステップがより具体的で子どもの側にたったものとして再構築されてきた。
- ② 支援の手だての明確化……学習ステップの中に主体的な学習の原動力となる「めあて」を位置づけることにより、教科・領域でめざす学力との関連の中での具体的な支援の手だてが一層明確になった。
- ③ 授業仮説の設定……授業研究における授業仮説の設定により、指導者一人による学習評価から、より多くの知見を集めての授業研究が一層充実してきた。また、適切な支援のあり方についても整理されてきた。

これら教科・領域特性から研究をすすめてきたことによる授業のあり方における成果に対して、子供なりの気づきや感じとりに着目すればするほどその教科・領域でめざす学力の育成をより明確にしていく必要がある、といった内容面での課題が出てきた。さらに、各教科・領域を含んだ「子どものくらし」全体を見据えた、トータルな視点も必要であると思われた。

(2) 研究テーマ「自立に向かう子どもたち」設定の背景

前述した研究の経緯から、本校では、「子どものくらし」といった視点をもって研究をすすめることとした。児童の現在の課題、今後身につけてほしい資質や能力についてどのようなものが考えられるか、できるだけ多くの項目を出していった。それらの項目を整理すると「自立」というキーワードでまとめられた。

「自立」について整理された項目からは、めざす子どもの行動指標として次のようなものが挙げられた。

- ① 基本的な生活習慣が身についていること
- ② 自分の思いを表現できること
- ③ 他との関わりがもてること、互いを思いやることができること
- ④ 自分のことが分かっていること、自己評価できること
- ⑤ 自ら学ぶ意欲があること
- ⑥ 行動に責任がもてること
- ⑦ 自分で考え、判断し、行動できること
- ⑧ 自分の願いに向かって努力できること

本校では、「自立」というのは、完成されたものではなく、常に「自立」という方向をめざして

いくものであると考え、「自立した子ども」ではなく、「自立に向かう子ども」として、そのめざす子ども像を考えていくものである。そして、「自立に向かう子ども像」としては次のようにまとめられた。

発達段階に応じて、他との関わりの中で、自ら考え、判断し、行動できる子ども

この子ども像をめざしていくことによって、子どもたちが身につける学力は、主体的思考力や課題解決能力、関わりの中で自分に自信を持ち自分らしさを探求していく力であると考えられる。

先頃出された第15期中央教育審議会第一次答申では、今後の教育の基本的方向として次のような内容が挙げられている。

- 豊かな人間性など時代を越えて変わらない価値のあるものを大切にするとともに、社会の変化に的確かつ迅速に対応する教育が必要。
- これから求められる資質や能力は、変化の激しい社会を「生きる力」。
 - ・自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力
 - ・自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力
- 今後の教育では学校・家庭・地域社会全体を通して、「生きる力」を育むことを重視。「生きる力」を育むためにも、個性尊重の考え方は一層推進されるべき。

ここで重視されている「生きる力」は、正に本校で考える「自立に向かう子どもたち」でめざしている力に一致するものである。

(3) 研究の方向

「発達段階に応じて、他との関わりの中で、自ら考え、判断し、行動できる子ども」を育成するためには、自らやり遂げる必然性のある活動や場の設定、他と関わる必然性のある活動や場の設定が必要である。そこで、研究をすすめるにあたっては、次の点を重視していくものである。

- 自己学習（自己のめあて把握の力、自己計画力、自己決定力、自己評価力を育むもの）
 - 他との関わり（自分と自分を取りまく他の人、物との関わり）
 - 体験学習（実感や達成感のもてるもの、考えたり判断したり行動したりする基礎となる体験）
- これらもとに「自立」という点から次の手順で研究を推進していく。

- ① 現在の各教科・領域、子どものくらしを見直していく。
- ② 必要な体験をふまえた総合学習を設定していく。
- ③ 各教科・領域、総合学習、子どものくらし全体の関連を図る。

本年度は、各教科・領域特性に応じて「自立に向かう子どもたち」の具体的子ども像を明らかにした上で、教科・領域内容の統合および内容の厳選、他教科・領域との関連、総合学習への発展の可能性を検討吟味し、具体化していくものである。

2 研究の具体的内容

(1) 研究の進め方

① 夏期研修について

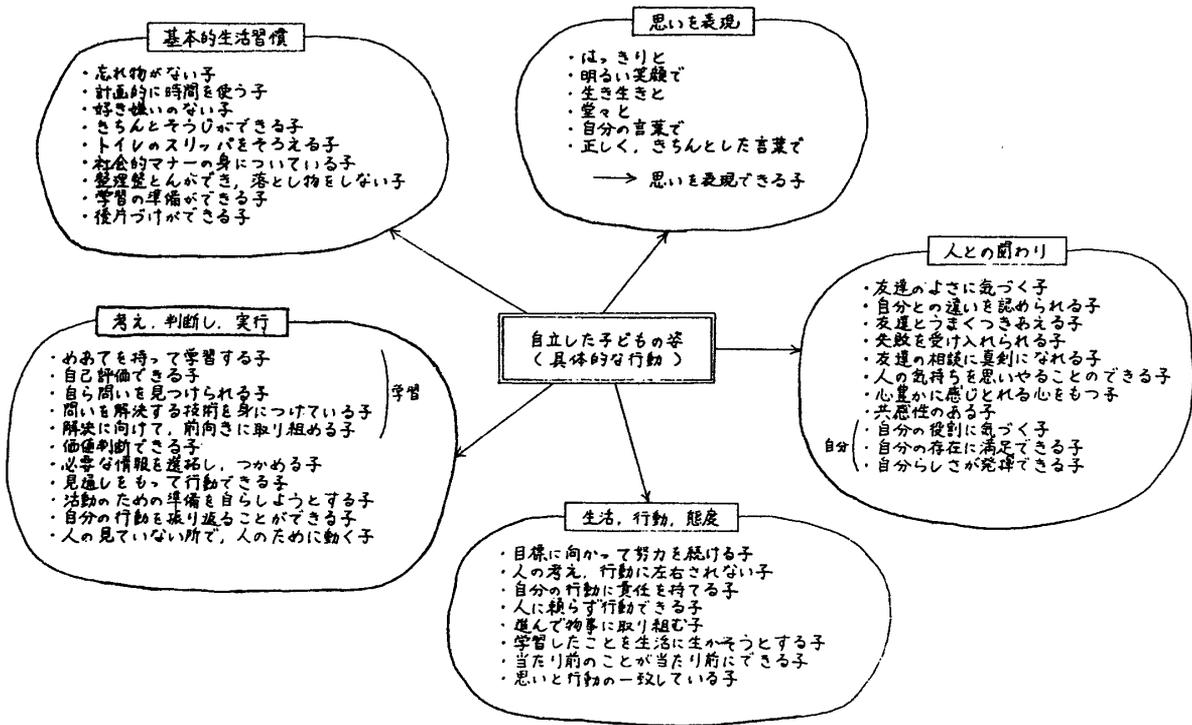
自立についての研究を進めるにあたり、次の2点について自由に考えを出し合った。

- 自立した子どもの具体的な姿について
- 子どもたちの自立を支える具体的な体験について

出された考えは研究部で集約をし（次頁参照）、それをもとに、任意に決定した5グループにわかれて研修を深めた。各グループで話し合われた内容は、全体会で確認・討議することにより、今後の研究の方向性を少しでも明らかにすることができた。各グループの発表は、次の通りである。

	自立した子どもの姿	子どもたちの自立を支える体験
1 G	人と人との関わりの中で 他者受容, 自己受容, 自尊感情 ↓ 共感性のある子	自分だけの力で…栽培, 身辺処理 集団・グループで…宿泊
2 G	互いを思いやる 自分で判断し, 行動できる (発達段階, 子どもの実態から)	宿泊…発達段階から考えていく必要 “見通し”それぞれの行事をダイナミックなものに
3 G	自ら考え, 判断し, 行動する	具体的な体験において, 重視するものを明確にしておく (プリント)
4 G	5つの枠の関わりを考えていく必要が… 人間尊重の精神を忘れてはならない 自ら発見, 考え, 選び, 決定し, 行動 ↓ 生活に生きるもの	<ul style="list-style-type: none"> • 日常の学校生活でできるものを, まず • 研究テーマとの関わりの中で, 特設を
5 G	人との関わり, 異存と独立, 自分の願い 自立…生活力と学力に支えられるもの 生活習慣 (低) 人との関わり (中) 考え, 判断, 実行 (高) ↓ 思いを表現	ぶつかり合う体験 対 親, 教師, 友, 自然 計画を立てる力を育む 価値あるものを高める→ものの見方が変わるような 他者との関わり 共生 自らの生活や文化を作る, 自発的な自己活動の場

〈自立した子どもの姿〉



〈子どもたちの自立を支える体験〉



② 校内授業研究

ア 方法についての考え方

研究については、各自の研究教科に限らず、他教科から学ぶことも重要と考えた。そこで、全員参加による全体授業研究の形態をとることとし、より多角的な意見を求めることができるようにした。そのため、自習時間が増えるなどの問題も生じるが、研究校としての責務を果たすためにはやむを得ないと考えた。しかし、授業時間の確保という点から、これまで行っていた全体での事前検討会の代わりに、教科領域における事前検討と個人検討（指導案を授業実施日の1週間前までに全員に配付）という形をとることとした。

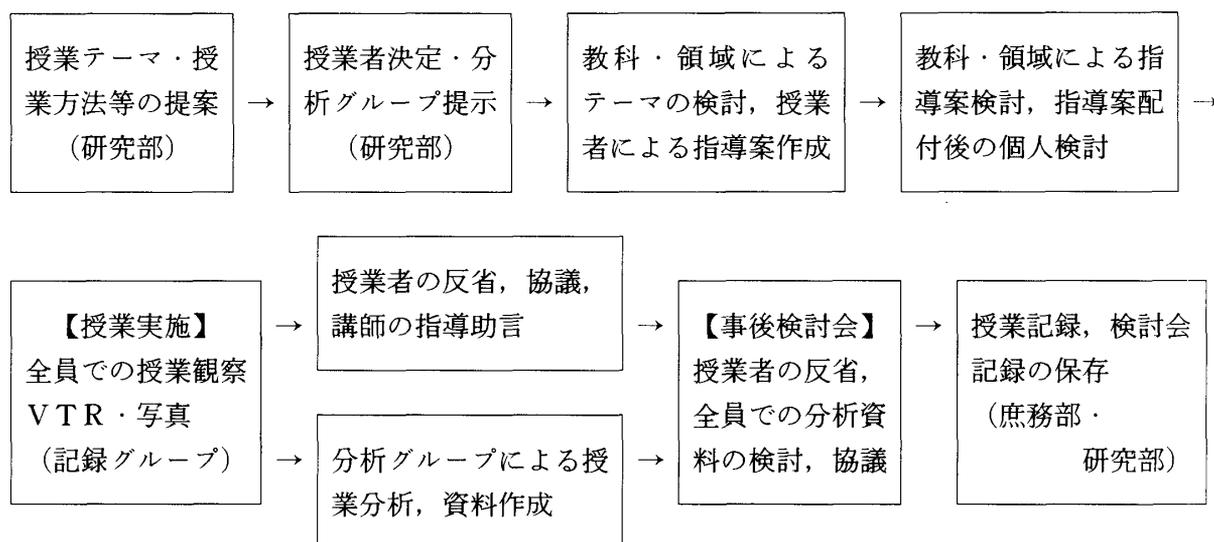
事後検討会については、分析グループによる分析資料を中心に全体での検討会を行い、教師集団のフィルターにかけることによって、テーマのとらえ方の確認・授業内容の充実・授業評価の的確化を図った。ここでは、授業観察・授業記録をもとに研究テーマ・授業仮説などの視点から分析グループによって行われた授業の吟味、代案の提示などを含む詳細な資料をもとに研究を深めていくことをねらいとしている。また、授業後すぐに行う検討会には、授業者・分析グループ・講師の先生が参加し、授業が新鮮なうちに協議できるとともに、講師の先生に適宜話し合いに参加していただき、ご指導をいただこうというねらいがある。

分析グループの編成は、5グループとし、各授業を研究教科とする者を1名、研究部員を1名ずつ配置した。授業分析及び授業記録をこの5つのグループが輪番で行うこととした。

以上の考えを受け、次のような方針で授業研究を進めた。

- ア) 全体授業研究の形態で行う。
- イ) 指導案を授業日の1週間前までに、全員に配付する。
- ウ) 事後検討会を実施する。
- エ) 分析グループで資料（分析、授業記録）を作成、発表する。
- オ) 文章資料・VTR・写真により記録化する。

なお、授業研究の大まかな流れは次に示すとおりである。



イ 授業研究の実際

研究会以降、各月に1回の授業研究を行うことを基本として日程化を行った。教科の設定については、各教科で選定した授業者の所属学年行事との関連や個人的な動向等を考慮しながら研究部で行った。3学期は研究のまとめの時期とするため、2学期の内に授業を実施することとした。

また、本年度も授業仮説を指導案に盛り込み、その授業仮説に基づき授業分析の視点を設定し、事後の検討会議を行った。各授業の授業研究における授業仮説は次の通りである。

教科・領域 授業者	単元・題材 (学年)	授業仮説
障害児教育 総合 関教諭	えんそくにいこう (養護学級低学年組)	児童に遠足の場での具体的な道具等を提示すれば、児童は、遠足に対する期待感を持って自らがしたいことをワークシートに表すことができるであろう。
音楽科 登教諭	ようすをおもいうかべて (第2学年2組)	歌詞の表す情景を想像したり、工夫した表現を聴き合う活動を通して自分たちの表現を振り返るならば、歌の気持ちに対する自分のイメージを深めることができるであろう。
体育科 須山教諭	テーパーボール ～遠くへとばそう～ (第3学年2組)	飛距離を得点化したゲームを行うことを前提に、課題を意識して練習に取り組むならば、遠くへとばすための自分にあった条件を模索しながら自己決定し、ゲームにおいてもそれを意識した「打つ」動作が見られるであろう。
生活科 川崎教諭	点字ってなあに (第1学年1組)	点字タイルにふれることによって、多くの問いを持つならば、自分の調べたいことを見つけることができるであろう。
社会科 佐藤教諭	世界にレモンジュースの 雨が降る (第6学年2組)	酸性雨が発生する自然科学的なメカニズムを捉えたりえて、酸性雨の本質的因果関係を追求する場を設定するならば、児童は酸性雨を自分自身の問題として捉えるとともに、自分なりの解決方法を見いだそうとするであろう。

③ 校内研修会

これまでの研究実践をふりかえりながら、新しい研究の方向を探るために、外部から講師の先生をお招きしご講演をいただいた。ここでは、京都大学高等教育教授システム開発センター教授、梶田叡一先生および京都女子大学教授、北尾倫彦先生のご講演の要旨を紹介する。

梶田叡一先生のご講演（平成8年6月7日：第102回東雲教育研究会講演より）

なぜ「感性」が問題か

私たちがある事柄を概念としてくくってしまうと同じ言葉でくくってしまう。また、その概念でコミュニケーションするとわかったような気がするが、実は、その概念の中身や概念を支えている実体は全然違うことがよくある。

例：「冷暖自知」……冷たい・暖かいは、自分で感じてみなければわからない。「暑い」と言っても、普段どのあたりで暮らしているかによって全然違う。沖縄の人の「暑い」と言うのと北海道の人の「暑い」と言うのは、言葉は同じでも感じ方の中身が違う。

新しい学力観

- 見える学力……わかる、できる、覚える、知識・理解、技能
- 見えない学力……関心・意欲・態度、思考力・表現力・判断力

「見える学力」を海面下で支えている「見えない学力」を大事にすべきである。つまり、わか

ったつもりになっていることや言葉だけで覚えている、概念だけで覚えていることが一人歩きしてしまっていて、それを使うことにこだわりがなかったり、価値判断も入っていなかったり、見通しもない中で使ったとしても、本当に生きては働かないということを問題にしている。

例：「オウム事件」……他人に対する感覚、世の中に対する感覚、いいのか悪いのかの感覚ができていない現在、「感性を育む」ことは、教育の基礎に関わる現代的な課題である。

したがって、自分で知ったつもりになっていることが、本当に実感し、納得し、自分の本音でわかったり、できたり、覚えたりしたことなのかということ、もう一度考え直す必要がある。

→ 感性の問題は、教育にとって土台の話である。

「感性を育む」「感性を耕す」ということ

A) 自分の実感・納得・本音を大事にする

冷暖自知の世界に根ざした形で、具体的な認識・技能を成立させていくということである。教師も自分の言葉で自分自身の体験に即して語れるような言葉をたくさん持っていなければならない。子どもも教師も、お互いに自分の実感、自分の納得、自分の本音にいつでもこだわって考える姿勢を持つことである。ただし、いつでも自分の実感・納得・本音がいいものかということとそうばかりではない。独りよがりだったり、自分勝手だったりすることも多い。しかし、そうであったとしても、ひとまずそこにおいて考える練習をすべきである。

B) 実感の世界を耕すために体験をさせる

本ばかり読んでいると、わかったつもりになって実体験が弱くなる。だから、とりあえず何でも首を突っ込んでみるといった、体験に対する食欲さがほしい。それが本当に実感の世界を深めていくことになる。一番よいのは直接体験だが、難しければ映像やドキュメンタリー的な記録映像的なもの、あるいは生の資料を活用したい。そういうもので自分の実感的な世界を豊かにしていけないと、自分の知識が、どこかから与えられた、きれいに整理された図式的なもので終わってしまうような気がする。

C) 自分の「わかった」「覚えた」ということを活用して、新しい感覚を身につける

いいものを知っていないと、いろんな物やいろんな事に触れた時に、表面的な物しか見てとれない。見えない部分から上がって、見える部分で結晶するような教育活動の工夫が必要だが、もう一つには、始めから知識を得て、その知識を具体的なものに適用して自分なりに味わってみるというもう一つの道がある。これによって、下の見えない部分が耕されていくということも頭に入れておく必要がある。自分の感覚が、知識を持つことによって、今まで感じたことのない感じ方になることもある。

○ 「見える学力」がつくことは学力保障であり、「見えない学力」がつくことは成長保障である。学力保障がないと学校ではない。しかし、成長保障がなければ教育ではない。

北尾倫彦先生のご講演（平成8年9月6日：校内研修会講演より）

現代社会の問題点と「自立」

世の中の要請：中央教育審議会の第一次答申から

キーワードは「生きる力」 → 現代の子どもの弱点

○主体的思考と課題解決能力……自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する力

○自律と連帯……自ら律しつつ、他人と共に協調し、他人を思いやる心、感動する心などの豊かな人間性

○健康と体力

「自立」は、上記の2番目と1番目に深く関わるテーマである。2番目とは人格的側面、1番目とは学力的側面として関わりが深い。

自立のとらえ方

A) 人格論としての「自立」

○心理学上の自立心の発達

第一反抗期と第二反抗期という、幼児期と青年前期に非常に大事な時期がある。2, 3才の頃の反抗現象は、自分が存在していることの確認であり、青年期の親の干渉の拒否は、自分という者の生き方の模索（アイデンティティーを探っている時期）である。

1年生あたりでは、第一反抗期で問題になったような自己の確立という意味での自立心、自分でやるということが問題になり、6年生くらいになると、自分らしい生き方、自分らしさの探求というアイデンティティーの面に重点をおいた自立心の教育が大切であろう。このように、小学校では発達段階の差が大きいので、自立心のウエイトの置き方を変える必要があるであろう。しかし、こうした自立心の教育は、学校の中だけでは十分にできない。

○人格形成としての教育目標の「自立心」を、学校の中でどれだけ育成するか

これまでの学校教育は、先生からの一斉指導が強すぎた。もう少し、子どもが自分のプランで学習する、つまり自己学習を教育課程の中に位置づけることが必要である。自己学習において大切なことは、自分で「Plan・Do・See」をすることである。二つ目は、総合学習や体験学習を推進すること。しかし、体験学習の理論が十分確立されていないので、学力論や評価論についての研究が必要であろう。ポイントになるのは、指導法と学習の構造化の問題の2つである。さらに、こうした学習の評価で大切なのは、共感と個人内評価である。

B) 学力論としての「自立」

主体的思考と課題解決能力の育成 → 問題解決的な学習の場の確保が重要

子どもにとっての課題は、生活上の問題でも学問上の問題でもどちらでもよい。大切なことは、子どもが課題に対して学ぶに値する、解決に値する課題であると思うかどうかである。

課題の条件：現実感（リアリティー）と論理感（ロジック）

課題の解決過程の3つのステップ

1ステップは拡散的思考を引き出す段階、2ステップは収束的思考や論理的思考に入る段階、そして3ステップは再び拡散的思考に帰る段階。

授業の類型化……求同求異の二次元モデル

求同とは全部の子どもが同じようにすることであり、求異とは一人一人の違いを認めていくこと。目標の求同求異化と方法の求同求異化で、4つの授業の型に類型化することができる。

○求同求同型……目標も方法もみんな同じ。過去の一斉画一授業。

○求異求同型……目標は多様だが方法は一つ。

○求同求異型……目標は一つだが方法は多様。

○求異求異型……目標も方法もフリー。自由研究、自己学習。

日本には、似たような一問一答式の授業が多すぎる。子どもに主体性を完全に移譲して、子どもが問題を解決していくという学習の場がもっとあってもよいのではないか。

(2) めざす子ども像とその具現化への方途

新研究テーマのもとに、各教科、障害児グループにおいて、「めざす子ども像（自立に向かう子ども像）」を明らかにするとともに、その「具現化に向けての方途（研究の方向性）」について、話し合いをもった。次の表は、各グループで話し合った内容をまとめたものである。

①めざす子ども像

国語科	<ul style="list-style-type: none"> ○自分のめあてをもつ ○学習の見通しをもつ ○学習について自己評価（ふりかえり）できる ○言葉自体のもつおもしろさに気づく ○登場人物に同化し、お話の世界に入り込む ○登場人物の生き方や考え方を知り、その価値にふれる ○自分なりに生き生きと表現する ○友達によさに気づく
社会科	<ul style="list-style-type: none"> ○身の回りから問題や課題を見つけだし、それらに対して自分なりに予想したり、友達と交流したりして、問題意識を焦点化することのできる子ども ○問題解決の方法や内容、手順など自分の学習計画を具体的に立案し、問題解決への見通しをもつことのできる子ども ○自分なりの解決策に基づいて、資料を取捨選択しながら、課題を科学的に追究したり、合理的に意思決定したりすることのできる子ども ○調査活動を自分なりの観点でまとめ、表現方法を工夫することのできる子ども ○学習の過程で獲得した様々な能力（知識や技能など）を次への学習につなげたり、実生活に生かしたりすることのできる子ども
算数科	<ul style="list-style-type: none"> ○自ら問題を見つけ、情報収集（法則化も含む）し、解決していこうとする ○学習した内容を身の回りの事象や事物と結びつけて捉え、生活をより豊かにしていくことができる ○学習した内容を、設定条件を変えるなどして、より深化・発展させていくことができる ○問題解決の過程において、自分の考えをもち、他の子どもと意見を交わすことにより、他の子どもの考えのよさを吸収し、自らを修正・発展させていくことができる ○自己の解決過程および共同解決の場における自己を評価（メタ認知）し、より望ましい姿へと変えていくことができる
理科	<ul style="list-style-type: none"> ○日常の事象の中に課題を見つけだすことができる ○課題解決へ向けて行動を起こすことができる ○自分で課題解決の方法を考え出すことができる ○具体的な視点をもった観察・実験をすることができる ○自分の考えや他の考えを正しく評価することができる ○解決方法の優れている点に気づくことができる
生活科	<ul style="list-style-type: none"> ○具体的な活動や体験を通して知的な問いや実践的な欲求を見つける ○自分で見つけた問題について、自分なりに解決する方法を考えたり、試したりする ○自分で気づいたり感じたことを豊かに表現する ○自分なりの考えをもち、考えに基づいて、判断したり、決定したりすることができる ○自分や友達のしたことをふりかえる ○生活科で活動したことをもとに、自分の生活を自分で豊かにしたり、工夫しようとする
音楽科	<ul style="list-style-type: none"> ○音楽の基礎能力を身につけ、進んで音楽活動をしている ○音楽活動をする中で、主体的参加の実感を味わっている ○音楽を通して、子ども同士や教師との関係を深めながら、感動を共有している
図画工作科	<p>《高学年》</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自らの計画を立案し、見通しをもつことができる ○必要な素材、情報を収集することができる ○自分らしい価値を認め、友達によさを受け容れられる <p>《中学年》</p> <ul style="list-style-type: none"> ○見通しをもてる ○活動に工夫や改善を加えながら活動しようとする ○よりよいものを求めて試行錯誤を繰り返せる

	<ul style="list-style-type: none"> ○自分らしさを思う存分表現できる ○友達のをさを認め合える <p>《低学年》</p> <ul style="list-style-type: none"> ○活動に夢中に取り組もうとする ○素材集めを喜んでしようとする ○友達を楽しく活動に取り組める
家庭科	<ul style="list-style-type: none"> ○自分なりの考えをもち、それを表現したり実践したりすることができる。 ○自分の生活を楽しみながら、それをよりよいものを創造していく。 ○他との関わりをもち、友だちや家族の思いを大切にできる。
体育科	<ul style="list-style-type: none"> ○感性や情操を発揮しながら、受け身ではなく、運動にこだわり没頭し、主体的・能動的に課題を追究する ○学習した事柄を、生活スポーツとしてふだんのくらしの中に積極的に生かす ○人に言われて運動するのではなく、自分で考えて行動し、主体的に運動に関わっている
障害児教育	<ul style="list-style-type: none"> ○ことばや行動で自己を十分に表現し、主体的に行動する ○さまざまな集団やいろいろな人とのかかわり合いの中で、生活や学習をする ○いろいろな場面で判断したり、工夫したり継続したりして生活や学習をする

②子ども像を具現化するための方途（研究の方向性）

国語科	<ul style="list-style-type: none"> ○「学び方を学ぶ」学習の場の設定する ○課題づくりの場を設定する ○学習ステップの中の「見通す」「解く－解決の方法を考える－」に焦点を当てて研究を進める ○学習ステップでの「ふりかえり」を重視する (学習内容のみでなく学習方法をふりかえる) ○振り返りの観点を吟味する
社会科	<ul style="list-style-type: none"> ○子どもの主体的な問題発見をうながす場の重視 ○学習問題・学習方法・学習結果のまとめ方にかかわる自己決定場面の重視 ○合理的意思決定能力を育むための討論の重視 ○合理的意思決定能力の育成を中核にすえた教育内容のスリム化 ○社会的事象との主体的なかかわりができる場の重視
算数科	<ul style="list-style-type: none"> ○現実の問題を扱うという本物の活動にするための教材開発を行う ○子ども自身が課題を見つけることができる活動を仕組む ○お互いが意見を交わし、互いのよさを吸収し、自己を修正・発展させる場を設定する ○学習内容と関わらせて日常の事象を見直したり、学習内容を活用したりする場を設定する ○学習内容を発展させたり、問題点を明らかにするなどして、次時の学習内容を作り出す場を設定する ○解決過程における自己評価の場を設定する ○学習内容を発展させることによって単元を構成する ○既習の学習内容を基に、単元の学習計画を立てる ○算数科の学習内容を既成のものとして見るのではなく、子どもたちが築き上げるものとして扱う
理科	<ul style="list-style-type: none"> ○直観力を育てる（見通しをもって課題を解決していく経験を数多く積む） ○認知の方略を身につける（既に獲得している正しい科学概念をより確かなものとする方向に、新しく獲得した知識が働くよう学習を工夫する） ○教育内容の順序性を検討する (子どもの理解の仕方に合わせた教育課程の編成を行う) ○総合学習における試行錯誤の時間を十分にとる (自然の事物や減少についての基礎的体験を豊富にする)
生活科	<ul style="list-style-type: none"> ○問題解決的な学習のプロセスを一層重視する ○結果ではなく結果に至る過程を重視する ○子どもが自ら考え、判断し、自分なりの理論が組み立てられるようにする

	<ul style="list-style-type: none"> ○子どもの日常生活から意味ある活動や体験を取り出し、再現する ○「21世紀は福祉と共生の時代」という視点からの授業構成を考える
音楽科	<ul style="list-style-type: none"> ○自分たちの生活から、音楽に対する課題意識を高め、それがまた自分たちの生活にもどっていくような学習のパターンを設定することにより、音楽に対する切実感を深めるように題材設定の工夫を行う ○主体的に活動できる時間と場を設定する ○題材構成の工夫および教材の厳選についての研究を継続する ○学校行事と音楽活動との関わりをさらに深め、校内の音楽的雰囲気をも高める
図画工作科	<ul style="list-style-type: none"> ○自分で計画を立てていく手だてを養う方法を模索していく ○人、素材、時間、空間など、学習環境づくりを研究する ○鑑賞領域の研究をする ○教育課程の見直しを行う ○図工科と総合科の関わりを研究する
家庭科	<ul style="list-style-type: none"> ○「被服」「食物」「家族の生活と住居」の3領域を相互に絡ませた題材を設定する ○体験的活動を取り入れる ○自分の生活を見つめる機会を多く設け、その中から課題を見つけることができるようにする ○一人一人の考え、よさを大切にする ○他の教科との関連を明確にし総合的な学習を行えるようにする ○学校で学習したことを家庭にかえしていくことができるように、家庭との連携を図る
体育科	<ul style="list-style-type: none"> ○スポーツヒューマニティーを育む (「人を思いやる気持ち」「認め合う気持ち」を根底にした自己実現の在り方を追究する) ○学び方を習得できるようにする(自己教育力を育む) ○学習内容の妥当性を検討する ○各内容の基礎・基本を厳選する ○高学年の保健内容の総合学習への位置づけを考える
障害児教育	<ul style="list-style-type: none"> ○自己決定する場や活動を設定する (自己決定の実態を的確に捉えるようにする) ○学習の汎化を図る場や活動を設定する (各教科と総合学習の関連がより密接となるようにする) ○社会や多様な集団での関わりを設定する (児童の集団性の発達に応じて行う)

めざす子ども像の具現化へ向けての各教科・障害児グループの方途の中で多く示されている語句を抽出してみると、次のようなものがあげられる。

◎学び方の習得	◎課題意識	◎見通し	◎自己決定、意志決定
◎学習内容と日常の事象との関連	◎体験	◎学習内容の発展	
◎総合学習、他教科との関連	◎共生	◎ふりかえり	

3 本年度のまとめ

昨年度までの「感性」の研究では、授業レベルにおいて児童がどのようにしたら自分の課題を捉えて解決をし自己評価をしていくかということを明らかにしてきた。このことを基に、本年度は、「自立に向かう子ども」像を各教科、障害児教育において出し合い、その具体的な方策について授業を通して研究を推進してきた。そこでは、児童がトータルな暮らしの中から課題を見つけること、自分で解決の見通しをもち、活動に取り組んでいくこと、課題設定や解決の場で自己決定ができることなどが視点として挙げられた。

そこで、各教科、障害児教育においては次のような取り組みを進めてきている。

- 各教科において、その教科の本質的な課題は何かを明らかにする。
- 課題設定、課題解決における自己決定の場を、発達段階に応じて設定する。
- 他とのかかわりが必然的にもてる場を設定する。
- 児童が自分のくらしの中から課題を見い出していけるよう、各教科と総合的な学習との関連を図っていく。

本年度「自立に向かう子どもたち」を育てていく研究に取り組み始めたところである。「自立」というテーマが大きいものであり、どのように学習を進めていくかということまで焦点づけるところまでは至っていない。今後、本校で考えられる「自立」についての行動指標から、それにいたるまでを学習として設定するためのステップが必要となってくると思われる。